

猫 蓑 通 信

第 88号
平成 24年
(2012年)
7月15日発行
(年4回発行)



付けと転じ

青木秀樹

台風4号が近づいている宵、会社でプロジェクトチームを組んでいた気の置けないメンバーと酒席をともした。

当日の話題。「今日スポーツセンターに行ってきた」↓「体が硬くなって胡坐がかきにくい」↓「下着のパンツは左ききには不便」↓「野球は左バッターに有利」↓「体格が違う日本のラグビーは弱い」↓「ラグビーの強い」ニュージーランドやポリネシアの人には蒙古斑がある」↓「大型カメラでの大航海により勇者が残った」↓「狩猟民族と農耕民族の違い」↓「日本人は季節の移ろいに敏感」↓「異常気象の原因」↓「日本のエネルギー問題と原発の可否」↓「なぜ円高なのか」↓「企業の海外流失は止められないか」↓「日本の未来像」↓「長寿化を楽しめるか」↓「とりあえず次回はいつにしようか」という話題の流れがスムーズで、思いがけず長居をしてしまった。そして風に吹かれ濡れて帰った。連句作品を褒めるときに「よく球が転がっている」という。付けに無理がなく、それでいて

転じが効いている場合に使われる。「ところで」とか「話が変わるが」などという言葉をはさみたくなるような付け句は付いているかどうか疑わしい。

あまりにも個人的な思い込み、古典の誤解、特殊な用語などを用いるとそこで流れが止まってしまう。ギクシャクした流れは連衆を疲れさせ、座の楽しさを損なうことになる。連句の基本は先ず「付け」をしっかりすることであることを再確認してほしい。

連句の流れは「例へば歌仙は三十六歩也。一歩も後へ帰る心なし」(三冊子)といわれるように、停滞することや後戻りすることは禁物である。転じが連句のおもしろさの大きな部分を占めていることは確かである。

初心の方が少し連句の実作に慣れてくると、うまい句を作りたい、みなを驚かす句を作りたいという気が起きてくる。そして「転じ」に気持ちが行きすぎてつい「付け」が疎かになる。これは誰でも通過する知恵熱のようなものであまり咎められないが、自句の採られる率が大幅に低下することにより、このような症状に陥っていることは自分でもわかる。もう一度初心に戻って「付け」の本質を理解してほしいと

●目次●

付きすぎと離れすぎ	東明雅	2
第百二十一回例会藤祭作品	二十韻三巻	3
亀戸天神御鎮座三百五十年奉祝		
正式俳諧二十韻一卷		4
執筆を終えて	鈴木了斎	4
奉納正式俳諧配役		5
奉納直会二十韻二巻		5
可都三の連句を読む	二村文人	6
えひめ俵口全国大会参加の記	間瀬英美	8
えひめ俵口全国大会入賞歌仙から		10
事務局だより		12
猫蓑会オフィシャルサイトのリニューアル		12

願っている。

猫蓑会では初心に近い方にも実作会等で捌を務めていただくことが、他の連句グループとくらべて多いと思う。本来宗匠の役である捌を務めることにより、部分最適だけでなく一巻全体の最適を追求することを実感していただくことが目的である。障りのチェックだけでなく、一巻のメリハリを考えて、ここはこのような句がほしいと考えながら付け句を治定することを覚え、ご自身が連衆として句を考案する場合に生かしていただくためである。

連句は入り口が広く、奥が深い文芸である。初心、中堅の方々には、実作の場数を積むこと、迷ったら初心に返ることを心がけて精進していただきたいと私は願っている。

付きすぎと離れすぎ

東明雅

平成四（一九九二）年七月十五日発行

『猫養通信』第八号より転載

質問コーナー

【Q】 俳席でお捌きに、付きすぎている、離れすぎている、ということ言われることがありますが、この辺のことを分かりやすくお教えください。

【A】 連句というのは、前句Aに付句Bを付けて、この付け合った二つの句の間に、新しいAでもない、Bでもない、Cという味を創り出すものです。だから前句Aに対して、付句Bが似かよったもの、近過ぎるものでありますと、AにBをつけても新しいCが生まれる可能性がほとんど無くなってしまいます。このような前句との関係にある付句を、べた付けとか、付きすぎているとか言うのです。

A 恋の夜思ひがけなく雨降りて
B ままよしつぼりこの屋根の下

これでは、AとBとが全く同じで、付け合わせても新しいCを創り出すことはできません。それで、付句の心得として、「前句の続きを言うな」とか、「前句の根を切れ」とか言われ、前句から離れて付けることが要求されるのです。

A おもひ切たる死ぐるひ見よ
B 青天に有明月の朝ぼらけ

A 句からはすぐ戦場が連想されます。これがいわゆる根です。だから直接戦場を付けしないで、当日空にあつた有明月を出して、その下に展開される戦鬪と若武者の姿を想像させる。これがCになるわけです。

このように、付句は前句の根を切って、離して付けると、前句と付句との間に読者の想像が入りこんで、新しいものを生み出すのですが、さればと言つて、A・B二句の間を離しさえすればよいというわけではありません。

磁石のN極とS極とは、ある距離の限度でお互に作用するのですが、離れすぎると何の反応も起こしません。磁場の限界があるように、前句と付句にも離すには限界があつて、離れすぎると何の反応も生みません。それではAとBから新しいCが生まれる可能性が全然なくなるわけです。

ただ、離れすぎか否かの判定は、個人によって異なり、非常に難しく、はつきり言つてその基準を示すことは困難です。ただ、連句は座の文学ですから、捌きの人の判定、または一座の意見を参考にして、徐々にその程度を会得する外はありません。

元禄時代の「去来抄」には、「今の作者付くことを初心の業の様におぼえて、却て付かざる句多し。聞く人もまた聞こえずと人のいはむことをはちて、付かざる句をとがめずして、能く付きたる句を笑ふやから多し……と書かれています。付いていない句（離れすぎの句）をとがめないで、かえつてよく付いている句を初心者の句だとして笑う人は現代にも大勢居ます。まだわされないう注意すべきところです。

第二百二十一回例会

亀戸天神社御鎮座二百五十年奉祝

藤祭興行 二十韻二巻

猫養会の例会実作会作品は、あまり間を置かずに「猫養通信」に掲載・発表されるため、多くは未発表を条件とする各種募吟の応募作となることは通例ありませんが、今年の徳島国民文化祭の募吟では、東明雅先生考案の連句形式である二十韻が応募作品形式

となつたため、猫養会としては今回は例会作品についても応募を奨励しました。このため、実作会作品のうち、国民文化祭に応募された八巻については、文化祭開催以後に発行する第九十号まで掲載を延期いたします。

6・玄鳥の座

二十韻「玉串捧ぐ」

前田曜子 捌

天神に玉串捧ぐ春日和 曜子
 晩咲きの藤映る池の面 秀樹
 炬塞ぎの部屋はすつきり整ひて 明子
 またも追ひ出す座布団の猫 あや
 虎落笛聞きつつ曲がる月の辻 有子
 着ぶくれですと少女はにかむ 樹
 後ろからそつと手にふれ引きよせる 明
 安化粧品みんな余らし や
 ごみ箱にたかる鳥は孤独なり 樹
 羽生善治はチエスも名人 有
 ナオ 芝青く寝転んで見るピサ斜塔 明
 秘書の鞆に本屋大賞 樹
 こつそりとあなたの眼鏡かけました 有
 中年だから恋も欲張り や
 月影の照らす姿態の妖しげに 樹
 どぶろく呷り悔やむ我が過去 や
 ナウ 朱鷺復活祝ふ新聞またテレビ 曜
 地震断層そここにあり 明
 住み馴れし下北半島花万葉 や
 唄を歌へと笑ふ山々 有

連衆 青木秀樹 野口明子 中林あや

佐々木有子



9・帰雁の座

二十韻「藤陰を」

武井敦子 捌

藤陰をよぎり行きけり亀の群 敦子
 軟東風そよとわたる朱の橋 淳子
 春障子心静かに引き開けて 了斎
 つくかつかぬか試験点灯 要子
 夏月の皓皓照らす総武線 フミ子
 スカートよりも似合ふ短パン 斎
 野暮な奴嫌ひは好きと分らない 淳
 濠に張り出し和風かふえ建つ 要
 無農薬売り物にして脱サラし 淳
 シティーガイドに応募殺到 要
 ナオ 息白く街の谷間を漢たち 斎
 御用納めと酌む茶碗酒 淳
 上司との不倫の噂盛り上がり 斎
 遺された巢にそつと入り込む ミ
 放鳥の鴝よ幸あれ佐渡の月 斎
 復元なりし寺の爽籟 淳
 ナウ 御会式に連なる子等の高き声 要
 ケーブルテレビ俳諧を撮る 敦
 花衣明日葉しみに襟を替へ 淳
 口三味線に唄ふうららか ミ

連衆 上月淳子 鈴木了斎 山本要子

川口フミ子

11・雉子の座

二十韻「安堵」

由井健 捌

墨痕の連綿として藤五尺 健
 夏近しとて軽き袖丈 わこ
 畑を打つ姿は父に似るならん 央子
 スエッチバック鳴らす警笛 孝子
 ベランダに煙草くゆらし仰ぐ月 昭
 亭主の留守に先づは麦酒で 健
 深情け猫がうらやむ喃々語 わ
 新派役者の句碑をたづぬる 昭
 郷関を出づる男子の志 孝
 無免許居眠り肝に銘じよ 央
 ナオ 高層に長元坊の仮住ひ 健
 石狩鍋で家族団欒 わ
 よき恋に替へて下されマリア様 昭
 秋のタンゴに燃やすジェラシー 孝
 今日の中には夜叉の住みあるか 央
 爽籟の呼ぶ地震に逝く魂 健
 ナウ 信じれば何にでもきくコマーシャル わ
 好きなアニメをスマホ三味 昭
 花片を払ふ手踊り豆絞り 孝
 背中の稚児も山も笑へる 央

連衆 横山わこ 遠藤央子 坂本孝子

松原昭

平成二十四年四月二十四日
 於 亀戸天神社

亀戸天神御鎮座三百五十年奉祝神前正式俳諧
俳諧之連歌二十韻

亀戸の鎮座大祭藤薫る

秀樹

彌宜の袂を揺らす軟東風

郁子

裏山に小綬鶏の声聞きとめて

良子

心楽しく絵筆揃へる

文子

ウ 月の客凭りかかりをり帳筆筒

あや

逢瀬ひとたび胸のやや寒

明子

初恋はペーミンントの香の中に

千恵子

ベッツが急ぐモノコ海岸

わこ

楽団の常任指揮者決まりたり

酔山

脳波の波形規則正しく

有子

ナオ 船中に護国の策を温めて

蕉肝

ネバーランドを隠す夕立

文人

扇風機おもひだしてはまた回る

鐵男

起こさず帰る夢を見たあと

恭子

パスワード今の男の名前にし

佳之子

ミサイル防衛笑ふ冬月

芙美

ナウ 熊追うてまたぎが越える国境

雅子

孫へ土産のこけし携へ

鄭和

花吹雪この瞬間を抱き止め

孝子

とろり揺れある惜春の酒

執筆

平成二十四年四月二十四日 首尾
於 亀戸天神社本殿

猫養会では十月の芭蕉忌・明雅忌、四月の亀戸天神社奉納に
正式俳諧を興行し、この二回を同じ宗匠、執筆が務めます。

正式俳諧の不易と流行

執筆を終えて
鈴木了齋

平成二十三年十月と二十四年四月の正式俳諧執筆を仰せつかった途端に、健康トラブルが表面化し、二度の正式俳諧を綱渡りで勤めることになった。無事に終えることができたのは、ひとえにお役の皆様をはじめとする会の皆様のサポートの賜物と深く感謝する次第。

今年の亀戸天神藤祭は、御鎮座三百五十年祭を兼ね、記念行事の一環として、正式俳諧を正殿の神前で興行させていただくことになった。正殿には畳がないので、必然的に立礼で行うことになる。

松永貞徳が創始したという正式俳諧の歴史の中に、おそらく立礼の前例はない。それ以前の連歌の時代には、戦陣で床几に座つての興行などもあったに違いないと思うが、これも資料は残っていないので、手探りで立礼を工夫して行くしかない。検討と準備のため、昨年十月の芭蕉忌正式俳諧から立礼を試みることにした。ただし、十月の会場は畳の部屋。最後に懐紙を納めるのも床の間の芭蕉像の前なので、すべて立礼という訳にもいかず、従来の方式と立礼を折衷した、やや中途半端なものにせざるをえなかった。畳の部屋に立礼のための床几、机などを手配、設置するためにも、事務局をはじめとして相当の時間を余儀なくされたが、ともかくも立礼の正式俳諧の可能性、手応えを掴むこ

とだけは出来た。

四月の亀戸天神社での興行は、床几その他の設備のほとんどは神社側の備品を手配していただいたので、そうした負担も少なく、神社の祭員の方々による神事と正式俳諧を組み合わせる初の試みも、おおむねうまく行ったように思う。一般の参拝客にも公開される興行で、配役にいつものお役に加えて「解説」とあるのは、その観衆のための説明係だ。幸い、用意した配付資料も足りなくなるほど多くの観衆が集まり、大いに好評を博したとのこと。その手応えは、懸命に執筆を勤めつつも感じられた。地元のカールテレビ局が一部始終を撮影し、当日放映したことも併せ、多少とも連句の普及に資するところがあったのではないかと思う。

なによりも、正殿の神前で張行することの清々しさは格別だった。他のお役の方々や、連衆として列席された方々も同様に感じられたのではないだろうか。会として思い切つて立礼に挑戦して本当によかったと思い、そこで執筆を勤めさせていただいたことを有り難く思う。

もともと、ご高齢の会員の間では膝のトラブルなど、また相対的に若い層では畳で正座の習慣がない、などの要因で、立礼を試みる必要は以前から取り沙汰されていた。時代が変われば何事も「流行」して行かざるをえないが、そうすることで「不易」を確保し、後世に伝えて行くことができればと思う。その第一歩として、様々な不手際をご寛恕いただければ幸いです。連歌の守護神である天神様のご加護に感謝。

亀戸天神御鎮座三百五十年奉祝
神前正式俳諧配役



満尾した二十韻の懐紙を奉納し、真の礼を行う執筆。この後、祭員が懐紙をさらに奥の神前に供える。

宗匠	坂本孝子
脇宗匠	本屋良子
執筆	鈴木了齋
知司	吉田酔山
副知司	横山わか
座配	佐々木有子
花司	林鐵男
配硯	間瀬芙美
同	野口明子
老長	青木秀樹
解説	式田恭子

亀戸天神社懐紙奉納直会興行二巻

平成二十四年五月十五日
於 錦糸町駅ビル不二家

二十韻「太鼓橋」 式田恭子 捌

太鼓橋渡ればそこは夏の雨
心字の池に映る新緑
柔道部挨拶までも力みぬて
あんぱんばかり食べる休憩
歌ひつつ子供と帰る盆の月
その人の名を聞くも身に入む
どぶろくを一気に呑んで断つ想ひ
錆びて動かぬ長い門
官軍の赤熊は残る錦絵に
初めて買った腕時計する
ナオ 旅話午後の紅茶の香たて
ホエールウオッチ波しぶき浴び
寒雷の月と争ふ塔の先
今度の恋も頼る占ひ
親子ほど年の差あれど愛あれば
名もない猫の帰らない庵
ナウ 端切れ縫ふ門跡さまの絹の針
夢紡ぐごと春のいちにち
病より治りて見ゆる花万朵
友の自転車追うてうららかに

太鼓橋 恭子
心字の池 未悠
柔道部挨拶 孝子
あんぱん 敦子
歌ひつつ 志世子
その人の名 孝
どぶろく 敦
錆びて動かぬ 恭
官軍の赤熊 孝
初めて買った腕時計 恭
ナオ 旅話 世
ホエールウオッチ 世
寒雷の月 孝
今度の恋 孝
親子ほど 悠
名もない猫 世
ナウ 端切れ 孝
夢紡ぐ 世
病より治り 悠
友の自転車 敦

連衆 棚町未悠 坂本孝子 武井敦子
秋山志世子

二十韻「緑雨かな」 高塚霞 捌

菅公の社けがらせ緑雨かな
祝詞に和する青鳩の声
襲名の若手三人並びぬて
箆筒の奥に仕舞ふ友禪
名月の豊に映る己が影
待たせた夜の長さ恨みつ
カシオペア好きな彼氏と逃避行
貧乏作家またも落選
下町の思ひもよらぬ賑はひに
集会の猫露地へ散らばる
ナオ ネイティブが売りの講師は風邪声で
月のセーヌのホットワインを
怪物像見下ろしてゐる屋根の上
胸の谷間の深い尻軽
鮮血のやうなブーケを汝に捧ぐ
故郷を想ふは母想ふこと
囚はれの吾に羨しきはぐれ雲
亀鳴く頃を渡る晩鐘
花片の流転描きし花衣
しゃばん玉吹く姉と妹

菅公の社 霞
祝詞に和 了齋
襲名の若手 碧
箆筒の奥 健
名月の豊 斎
待たせた夜 同
カシオペア 健
貧乏作家 碧
下町の思ひ 健
集会の猫露地 斎
ナオ ネイティブ 碧
月のセーヌ 健
怪物像見下ろ 斎
胸の谷間 霞
鮮血のやうな 斎
故郷を想ふ 碧
囚はれの吾 斎
亀鳴く頃 健
花片の流転 碧
しゃばん玉 執筆

連衆 鈴木了齋 松本碧 由井健

亀戸天神社奉納正式俳諧作品と、同日の亀戸天神社興行の各作品は、古式に則って懐紙に墨書し、水引にて綴じたものを約一ヶ月後に同社に奉納します。懐紙奉納当日の神事と直会の後、正式俳諧の宗匠、執筆、および奉納各巻の捌が一冊して、数巻の二十韻を巻くのが恒例です。

可都三の連句を読む
二村文人



近年の連句作品を見ると、一句としては印象が鮮明で面白いけれども、前句とどこで付いているのかよくわからないものが少なくない。

『ひさご』や『猿蓑』に収められた芭蕉の連句は、規範や理想として読まれても、実作にそのまま生かすのは難しい。むしろ、旧派の連句に私たちの創作のヒントがあるのではないだろうか。

過日、古書展で矢羽勝幸著『俳人下平可都三』（下平可都三翁顕彰会、昭和五十年）を入手した。可都三（文政五〜明治四十三）の名は、『芦丈翁俳諧聞書』の冒頭に、国定忠治の処刑に立ち会ったエピソードとともに紹介されている。ここでは、同書に載る歌仙八巻のうち、門人の茂木秋香（文久三〜昭和十六）と巻いた両吟「雨の月」を取り上げて、明治以降の旧派の連句が、どの程度付筋をたどって読むことができるのかということを考えてみたい。

以下、付筋を七名八体説の八体に従って説明する。八体は、美濃派の支考が体系化したもので、次のように付所（付けのねらいどころ・手がかり）を八つに分類している（『連句——そが知りたい』おうふう、平成十五年）。

①其人—前句の人物がどのような人であるか、身分、職業、年齢、性別、身体、性格、言動などを見定め、それを手がかりとして付けるもの。

②其場—前句にふさわしい場所を見定め、山類、水辺、屋内、屋外などを手がかりとして付けるもの。

③時節—前句の内容にふさわしい時節、すなわち季節や年中行事などを手がかりとして付けるもの。

④時分—前句にふさわしい時刻的な頃合いを主眼として、昼夜、朝暮、時刻などを手がかりに付けるもの。

⑤天相—前句にふさわしい空模様など、天体や気象をもつて付けるもの。

⑥時宜—前句のその時の風俗や出来事に着目しその折にふさわしい状況や状態などももつて付けるもの。

⑦観相—前句の中に、人生、世相、その他喜怒哀楽の情などの手がかりを読み取り、その内容を付けるもの。

⑧面影—前句に、故事、古歌、物語などの趣を感じ取り、あからさまにそれと言わず、付句との間でほのかに浮かび上がるように付けるもの。

なお、「其人」について、従来は前句の人物にふさわしいものを付ける、つまり前句が人情の句であることが前提であると解されてきた。しかし、大野鶴士氏は支考の『西華集』（元

禄十二）の例に基づいて、「其人の付けの前句は、人物の描かれる句の場合もあれば、人物の詠まれていない句の場合も両様あることが知られる。其人の付けは、前句の人物の有無にかかわらずなのである」とし、其人の説明としては「前句にいかにもふさわしい人物を付けていく」とするのが正確だろうと述べている（『獅子吼』平成二十二年四月号）。以下の考察も、その見解に従うことにする。

歌仙「雨の月」の巻

あきらめた寢覚にもるや雨の月 秋香

靡く芒に起直る窓 可都三 其人

涸かゝる水に画筆や灌ぐらむ 香 其人

腰の瓢の音の淋しげ 三 其人

立白も糊摺磨も売物に 香 其場

家越車に積て来る雪 三 其場

ウ 憂いつらい寒はいつ明くる事ややら 香 時節

男もつ氣に成て針もつ 三 其人

耳たぶの厚い薄いを占にとり 香 其人

今日も況気の眠る堂島 三 其場

からかさの弾きの工の悪うなり 香 其場

畦も田になる道の黒鉾 三 其場

早苗とる菜も月を待こゝろ 香 時節

宮司の留守になる筈はなし 三 其人

反橋は升起易くて下りにくゝ 香 其場

かかり凧には竿も及ばぬ 三 其場

咲次第散次第なる花のもと 香 其場

三味線乞食場とる若芝 同 其人

ナウ

陽炎に鷺の足水ほつちりと

三 其場

気づかれてくる真間の継橋

香 其場

笈仏を平たい石に居え申

三 其人

撫れば下がる姫の胸元

香 其人

聞近くよろこび烏啼わたり

三 其場

木々に積た雪のほろ

香 其場

市戻り年の銚をせたら負

三 時節

大切な子が馬に蹴らるゝ

香 其人

大かたは尾に尾を付た再咄し

三 其場

貫目引つゝ運ぶ煙硝

香 其人

防人の月にも覗く遠眼鏡

三 其人

こぼるゝ露の止やうもなし

香 其場

ナウ

薺の咲萎む間も老しれて

三 其人

まだ定らぬ称宜の跡取

香 其人

水取の十日も前の稽古能

三 時節

口のほどけた鶯の来る

香 其場

待花にまたるゝほど麗さ

三 其場

誰か物となく並ぶ腰掛

香 其場

明治三十三年十月首尾

(可都三自筆懐紙によるが、一部表記を改めた。

また、句調の整わないところが見え、誤伝があ

るかと思われるが、そのままにした。)

脇は、窓辺に起き直る其人の付けで時分でも

ある。

第三は、「水潤る」が冬なので、「涸かゝる」
で秋としたものか。其人。

四句目も「瓢」が秋で秋四句。前句の人物が

腰に提げた瓢を付けた人情他の会釈で其人。

五句目の「磨」は「白」かとも思われる。さ

まざまな農具が売りに出されている情景と見て

雑の句とする。前句の人物がいる場所を付けて

其場。

折端は引つ越しの車に雪が積もっていたとい

うので其場。

裏の折立は「明く事」か。寒中の時節。

二句目は、寒明けを待つ前句の其人。

三句目も其人。

四句目は、吉凶を占っているのが米市場のあ

る堂島だという其場。

五句目の「弾き」は、傘を開いたり閉じたり

したときに止めておくでつばりのことで、「工」

の読みが不明だが、それが甘くなつたというこ

とか(ちなみに、相場が急に上がることを上弾

きと言う)。其場。

六句目は、畦道で雨に降られたということか。

「黒鋒」は黒土。其場。

七句目は其場だが、天相でも時節でもある。

八句目は、同じ村にある神社のことで其人。

九句目は、打越からの転じを考えると、亀戸

天神や住吉大社のような大きな神社と見るのが

よからう。其場。

十句目は、其場。

十一句目も其場。

折端は、其場とも花見の場所にいそうな其人
の付けとも取れるだろう。

裏では、古いをする句をはさんで、前句では

結婚を考えている女性、付句では米相場の立つ

堂島と大きく転じている。また、傘の不具(台も、

前句とは「況の眠る」気分や雰囲気と付き、付

句とは農村の実景と付いて、その変化は巧みで

ある。後半の五句は、ほとんど場所が変わらな

いけれども、芦丈翁の言う「玉が転ぶ」ような

滑らかな展開である。

名残の表の折立は、其場で天相でもある。

二句目は、其場。同じ作者の「反橋」と四句

去りだが、気にしていないようなのが面白い。

三句目の「笈仏」は、諸国を巡る六部などが

背負う厨子に入った仏像のことで其場。

四句目は、其人。『義経千本桜』の静御前と

狐忠信の道行のような場面か。

五句目の「よろこび鳥」は、吉事の前兆を知

らせるもので其場。この恋句に故事があるはず

れば、面影の付けということになる。

六句目は、下七に脱落があるが其場。

七句目は年の市で時節。

八句目は、其場。

九句目も其場。

十句目の「貫目を引く」には、値踏みをする

という意味がある。うわさ話をしながら煙硝を

運んでいる其場の付けと見た。

十一句目は、古代に転じて其人の付け。

折端は、其場。

「聞近く」や「防人の」の後に、現代連句で

は物語的な展開を求めたところだが、どちらも軽い場の句を付けている。三句目で物語を作らないというのは、旧派の連句の特徴と言えるだろう。

名残の裏の折立は、「老しれて」を人のことと取って、前句の露を見ている其人。観相でもある。

二句目は「老しれ」た其人。神祇も二句。

三句目は、東大寺のお水取で時節。

四句目は、其場。

五句目は、「またるゝほどの」かと思われるが、前句の其場の付け。

挙句も其場。前三句が春なので、異例ではあるが雑にしたのだろうか。(※注)

現代の連句では、ときに付筋を逸脱するような付けが認められるのかもしれないが、それは別に議論するとして、連句を巻く際に付筋を明らかにすることは、もっと意識されてよいのではないかと考えている。

注・挙句は属性を前句に揃えることが大原則なので、本来ならここは春にすべきところ。前句がたとえ春の五句目や恋の五句目だったとしても、挙句は春もしくは恋をそのままもう一句続けると「三冊子」にある。挙句を雑にするのは前句も雑の場合のみ。

富山大学人文学部教授（日本近世文学）

えひめ俵口全国大会参加の記 間瀬芙美

こんにちには、伊予の国松山。連句に関わってから松山に「いつか行ってみたい」という憧れがあった。とはいってもそのフットワークの重さを自負しているため、おいそれとは腰が上がらない。猫蓑同人会の作品を俵口へ応募したことで縁ができたのは、連衆の方々のお蔭と感謝している。

さて、子規と漱石が松山で同じ屋根の下一階と二階で数ヶ月間下宿生活を送っていた。その家を復元した「愚陀仏庵」の佇まいの空気に少し触れたい、だけがいい、よし松山にいくぞと奮起。

濃厚で人の好い漱石と気骨のある子規との友情。それを取り巻く伊予松山の有名無名の俳人達をも沢山輩出した町。漱石も子規のいる松山に行かなければ「坊つちゃん」も作品として残らなかつただろう。そう、松山には文学的に根の深い歴史がある。文学に疎い私だが道後温泉ぐらゐ浸かれる。そんなこんなで俵口連句会事務局の松永さんのご親切に乗り、二十八日フライトをする。

降り立てばなんと松山の街は柔らかな心地よい風が吹いていた。城端の躑躅は咲き始め、亀はまったりと堀で甲羅干し。市電に揺られてまづ道後温泉へ。重要文化財の湯殿にのぼせるほ

どどっぷりと浸かる、が「坊つちゃん」の様に泳ぐ勇氣はなかつた。

不思議な事に観光名所を巡っていても時間がゆっくりと流れるようだ。いつの間にか念願の「愚陀仏庵」では時間までも堪能させられていた。さて本題に入る、いや本題は懇親会ではないが、いざ懇親会会場へ。

国民文化祭にはないこのごんまりとした和氣藹々の雰囲気、演出が心地いい。連句協会のお歴々の方々は、連句に対する情熱をたっぷりと語られ、それらが個性と相俟って身近に楽しく、「連句とはなんぞや」の疑問を少し解きほぐされる。そしてカーテンを開ければライトアップの松山城をご拝顔させて頂き、正にご馳走尽し、宴もたけなわの中賑やかに終宴となる。その後は猫蓑の内田遊民、鈴木千恵子、鈴木了齋諸氏、それに小倉礼子氏から「ロビーで」と言われ、そうか夜の街を散策かと思いきや、ロビーで二十韻興行と相成った。おっそろしきは猫蓑連句仲間。

終えたのは十一時過ぎ、冴えている猫蓑先輩諸氏に敬服しきり。部屋に戻ってもさすが寝つきが悪かつた。

さて、二十九日大会当日。表彰式は来賓の愛媛県知事、松山市長他のご挨拶や表彰授与等も順調にとり行われた。講演会は「松濤軒の流れ（伊勢流）」講師小林静司氏。

六十人程の方々は十二の座に分かれ実作交流に入る。昨夜小川廣男先生から、折角だから歌

えひめ俵口全国大会・松山市教育長賞
歌仙「その外を」 鈴木了齋 捌

その外を人の流るる金魚玉 了齋
 目にも鮮やか凌霄花の色 篤子
 ブロックで汽車もお城も作るらん 豊美
 四角い部屋を丸く掃く癖 千恵子
 鳴く虫の居場所をさがす月影に 俊子
 山頂示す札のうそ寒 千
 木々を吹く風さやかなり五日市 篤
 ふたりの鼓動交じる口づけ 千
 エンゲージリングに刻む\$マーク 豊
 大国様の袋には何 千
 江戸期より残る北前船の家 篤
 鍵盤すべて叩くエチュード 俊
 寒月に透けるグラスを打ち碎き 千
 冬菊にある一すぢの赤 篤
 定九郎もんどりうつて谷底へ 豊
 婆が伝へるおてだまの技 千
 鶏の蓆に上がる花の昼 篤
 干し若布揉み茶漬掻き込む 俊
 ナオカタカタと揺れてうららかに絵具箱 豊
 みんなマスクをしてる遠足 篤
 子に孫に地球汚して遺す悔い 俊
 組み立て終はる恐竜の骨 篤
 モンゴルの大草原の涯の虹 豊
 知らぬ漢に嫁ぐ長旅 斎
 笠戸丸君を想へば汽笛鳴る 俊
 ラムをベースにシェイクする酒 豊

うごめいて海鼠に形なきごとし
 御用学者の誰が誰やら
 風の盆胡弓に御霊思ふ月
 隠元豆を筈に広げる

ナウ秋の日の猫がいつものパトロール
 ネットサーフィン果てしなき子等
 天邪鬼なかにかはい顔もぬて
 ひねもすからり織れる高機
 マニキュアは指に花は花の枝に
 絵風字風の揚がる蒼空

連衆 海津篤子 高橋豊美 鈴木千恵子
 三木俊子
 平成二十三年七月十八日 首尾
 於 庚申文化会館

えひめ俵口全国大会・愛媛朝日テレビ賞
歌仙「梅雨のリズム」 間瀬美美 捌

庭石を叩いて梅雨のリズムかな 美美
 蠅の子の湧ける葉の裏 孝子
 絵日記の白き頁を前にして 了齋
 とりあはず剥くキャンディーの紙 要子
 満月の沖過ぎり行く旅客船 明子
 鳩吹く人のひよる長き影 斎
 葉掘る時をり腰を伸ばしつつ 同
 金の話と恋の話と 孝
 賑やかに派閥領袖スキャンダル 同
 パオをたたんで羊引き連れ 要
 丘陵の彼方に眠る雪の山 斎

聖夜の月に満たす葡萄酒
 兄ちゃん気まま暮しのフリーター
 手先器用に直す靴底
 贅曲りくねつて浜に出る

瓦礫に生きて飼猫の鳴く
 住職は今年の花に目を細め
 風やはらかに絵蠟燭売る
 ナオ薩摩には南蛮風の唸る空
 木刀担ぎ走る山道
 血糖値高い血筋を受け継いで
 かつと燃えてはさつと捨てられ
 くしやくしやのシートに残る夢の跡

時鳥啼く幽霊の城
 溶かされて氷母は紅いつゆ
 運河の岸に舫ふ明け暮れ
 父さんの柩に入れる写真集
 煙が雲に変はる中空
 安達太良の稜線をいま離れ月
 鯛三尾を手開きにして

ナウ菊摘めば千草の筋の乱れつつ 斎
 置屋の電話鳴りも止まざる 孝
 予定表埋める中に横文字も 明
 郷土を背負ふ春の選抜 要
 古き良き時代を経たる花吹雪 芙
 ひとり残りて漕げるふらここ 要
 連衆 坂本孝子 鈴木了齋 山本要子
 野口明子
 平成二十三年六月十九日 首尾
 於 新宿ワシントンホテル新館

えひめ俵口全国大会・俵口賞
歌仙「花菖蒲」
内田遊民 捌

花菖蒲みづ紫に昏れにけり 遊民
南風吹き撫でてゆく類 千恵子
トレーラー電子部品を積み込みて 秀樹
猫ゆつたりと歩む路地裏 礼子
月見えて畳に揺れる影法師 徹心
けふも叱られ余す秋なす 市誠
ハローウィン小さき妖精化粧中 樹
眉整へて恋の十六 礼
春信の若衆姿は艶めいて 恵
どんでん返し共に奈落へ 心
ヒルズ族夢より醒めて塀の内 誠
浮き寝の鳥が波のまにまに 恵
肩ちぢめ月白く見ゆ冬の朝 誠
八百長疑惑晴らす角界 樹
大盃に斗酒も辞さずと飲み干して 恵
ついた渾名が関所弁慶 誠
漫ろゆく権現さまの花の径 礼
もの言ひたげに低く飛ぶ虻 樹
ナオ 遠浅の浜に商ふ焼柴蝶 同
世界各国TUNAAMI通じる 恵
蓄財は義理を欠けとの師の教示 心
同姓同名口座紛れて 恵
闇の中鶴匠操る綱さばき 誠
柔肌熱き羅の下 礼
AB型逃れきれずに認知する 心
八方美人皆に好かれて 礼

みちのくの秘湯に浸かる猿一団 心
ランプの下で読んだ地方誌 誠
密航者仰ぐ夜更けの月暗く 樹
高級品に何時かさんまが 恵
ナウ 干し柿が極上和紙に包まれて 樹
びつくり箱からピエロ登場 恵
節電の暮しにあれど生きる知恵 礼
陰影礼賛もつと拡がれ 誠
花一枝挿頭してシテの橋掛かり 民
柱時計が刻む麗日 心
連衆 鈴木千恵子 青木秀樹 小倉礼子
佐藤徹心 島崎市誠
平成二十三年六月五日 首尾
於 江東区芭蕉記念館
えひめ俵口全国大会・俵口賞
歌仙「化かされた」 鈴木了齋 捌
化かされたやうに四日となりにけり 了齋
ふいに嗅ぎ取る裏庭の梅 吃杏
童天に地平線より昇るらん 美々丸
信号待ちの人の足踏み 魚彦
中継点たすきをつなぎ倒れ込む 以志
くらりゆらめく朝冷えの月 彦
栗飯を釜いっぱいに炊き上げて 志
まだ帰らない重陽の客 丸
耳許に少年の息せはしなく 杏
うなみをとめの頬を撫でやる 齋
ガタゴトと鉄路の音のどこまでも 杏

切り立つ崖の迫る海沿ひ 丸
月明に兵が並んで掘つた雪 志
兎はうまい狐狸は臭いぞ 杏
やうやうに追加公演ビルの地下 彦
角樽の酒杯にあふるる 志
子供等をすつぽり覆ふ花の傘 丸
風車手に走れ走れよ 齋
ナオ 春飛魚の青きは島の潮の青 彦
刻を操る神々の業 丸
転調に身じろぎもせず大ホール 杏
仮面の御者が街角に消え 齋
王女ならクルスのほくら首筋に 杏
裸で君に囚はるる夢 齋
付文に懸けた命の祭の夜 彦
ずるさが見えるやさしさの後 丸
百五十キロのシュートを叩き込む 志
テキサス州に哭く虎落笛 齋
山塊もあらはに月の渡りつつ 杏
しめじ舞茸大鉢に盛る 彦
ナウ ぴかぴかの廊下に拾ふ木の実独楽 杏
隠居の沙汰を嘆くともなし 彦
リニユーアルSL汽笛一声を 志
遍路等着て登る坂道 同
篝焚け花散る空に星も散る 同
つばめまどろむ白壁の軒 齋
丸
連衆 河合吃杏 石浜美々丸 御園魚彦
白石以志
平成二十四年一月四日 首尾
於 国立オリンピック記念青少年総合センター

●第百二十一回例会（藤祭）が開催されました

四月二十四日（火曜日）、亀戸天神社正殿にて亀戸天神社鎮座三百五十年祭奉納正式俳諧興行が行われ、その後十一卓に分かれて二十韻を興行しました。今号の2頁から5頁をご参照下さい。

●第二十二回猫養同人会総会が開催されました

六月十七日（日曜日）、新宿ワシントンホテルにて、第二十二回猫養同人会総会が開催されました。議事のうち、七草にわかれて歌仙を興行し、全席披露ののち、午後五時に閉会しました。当日の歌仙七巻は次号（第八十九号）に掲載の予定です。

●今後の予定

●第百二十二回例会（平成二十四年度総会）

七月十八日（水曜日）十一時～十七時（受付十時半より） 於 江東区芭蕉記念館

●正式俳諧稽古

九月十九日（水曜日） 於 江東区芭蕉記念館

●第百二十三回例会

芭蕉忌正式俳諧興行 明雅忌脇起源心興行
十月十六日（火曜日）十一時～十七時（受付十時半より） 於 江東区芭蕉記念館

●猫養基金にご協力ありがとうございます

- 山寺たつみ様 平成二十四年四月 五千元
- 源心庵の会様 平成二十四年四月 二万円
- 匿名 平成二十四年四月 五千元

- 諏訪欣二様 平成二十四年五月 三千元
- 室 房子様 平成二十四年六月 一万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

●受賞

●第十六回えひめ俳句連句全国大会

- 松山市教育長賞「その外を」 鈴木了齋 捌
- 愛媛朝日テレビ賞「梅雨のリズム」 間瀬英美 捌
- 俳句賞「新庵に」 鈴木了齋 捌
- 俳句賞「花菖蒲」 内田遊民 捌
- 俳句賞「化かされた」 鈴木了齋 捌
- 右の五歌仙のうち四巻を今号の10、11頁に収録。

●新同人（五十音順）

- 石川 葵 高山鄭和 前田曜子 松原昭
- 山寺たつみ

●会員の作品集・書籍など

- 『続 藤原龍一郎歌集』（現代短歌文庫）
藤原龍一郎著 砂子屋書房刊 一七〇〇円＋税
- 四宮連句会作品集第九巻『新庵』
六月十五日刊 お問い合わせは式田恭子まで。
- 連句協会三十周年記念『現代連句集Ⅲ』
五月十五日 連句協会刊 二五〇〇円

●訃報

●会員の竹田登代子様をご逝去されました。つつしんでご冥福を祈ります。

●転居

●奥野美友紀 富山県富山市内移転



猫養会オフィシャルサイトのリニューアル

前号で、猫養会オフィシャルサイトのURL移転をお知らせしましたが、その後、五月にサイトの内容、デザインを一新しました。

従来通り、猫養会の基礎資料閲覧の便に重点を置いていきます。また、連句についての疑問点をちょっと調べたい、といった場合の使い勝手の向上や、猫養会の活動についての速報性の向上などはかっています。東明雅先生の頁や、猫養会の師系の頁など、サイトだけのオリジナルのコンテンツもあります。インターネットで連句について調べようと考える会員外の方が、Googleなどの検索サイトを使って「連句」を検索した際に、閲覧候補の上位に猫養会サイトが表示されるための仕組みを取り入れていますが、日頃のアクセス数が多いことも、検索順位が上がるための重要な要素です。インターネットをお使いの会員各位は、折に触れてアクセスして下さい。ようお願いします。URLは左記の通りです。
<http://www.neko-mino.org>

季刊 『猫養通信』第八十八号

平成二十四年七月十五日発行

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了齋

印刷所 印刷クリエイト株式会社